



Title	後藤新平研究：「大日本主義者」の国家構想〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	張，易臻
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16487号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94947
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	I-chen_Chang_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 張 易臻

主査 教授 権 錫永
審査委員 副査 教授 川口 暁弘
副査 教授 水溜 真由美

学位論文題名

後藤新平研究―「大日本主義者」の国家構想―

本論文は、医師として、内務官僚となって公衆衛生の向上と社会政策の立法に尽力し、台湾総督府民政長官、南満洲鉄道株式会社総裁、内務大臣、外務大臣などを歴任した後藤新平の政策構想とその思想を論じる。

後藤新平については、国内の社会政策や外交政策・植民地政策を中心に多くの研究の蓄積があり、国際的な視野をもった政治家、「時代の先覚者」として肯定的に評価する傾向がある。後藤の政策構想や提唱の思想的特徴を表す評語「統合主義」も、国内および対外関係における結合と調和こそ、後藤の思想の核であったとするものである。こうした肯定的な評価の一方で、鶴見祐輔の古典的な評価の一つに挙げられる「純然たる大日本主義者」としての側面が軽視され、詳細な検討が行われてこなかったことは、後藤研究の重要な問題点と言える。

こうした研究状況に対して申請者は、後藤の思想のなかに共存する大日本主義と統合主義を深く掘り下げ、その関係性を説明するとともに、後藤の思想を、日本近代史上の大日本主義の一類型として位置づけようとする。そのために、設定された課題は次の3点である。第1に、後藤の内外政策構想から協調的、有機的統合観を考察し、思想の実態を把握する。第2に、近代日本の政治および社会状況、国内外の思潮との関連性に着目して、後藤の思想を解明する。第3に、後藤の思想における西洋由来の生物学思想と「日本精神」の融合を明らかにする。加えて、後藤の関係史料および周辺の史料の徹底的な調査・分析も、重要な特徴となっている。

本論文は、日本主義者または「大日本主義者」であり、同時に「統合」を重んじる人物でもあった後藤の両面について、詳細な検討を加えた。後藤が日本の建国精神、日本精神、家族国家観を説き、日本の膨張の当為を説いた日本主義者かつ「大日本主義者」であったことを明らかにしたこと、また、後藤がそれらを抛り所として結合と調和を説いたことから、日本主義こそ後藤の統合主義の源であったことを明らかにして、後藤の思想のなかの日本主義と統合主義の共存を説明できたことは、後藤研究への大きな貢献である。

後藤は『日本膨張論』で、民族・国民の有機的膨張とは「大宇宙を小宇宙の中に包み、小宇宙が大宇宙の中に生存し発展するという円融無碍の相即主義」とであると結論づけた。このことについて、没後80周年記念事業として出された『世界認識（シリーズ＜後藤新平とは何か―自治・公共・共生・平和＞）』（藤原書店、2010）の序文には、「すべての民族・国民が円融する、神あるいは仏の境地に至ろうとする共生の要求」とあるとの理解が示されている。後藤のこの文言に彼の統合主義がよく表れていることは確かだが、この文言が戦前の皇道主義（日本主義）における「帰一」の発展原理の理論に酷似していることを見逃した、誤った理解と言わなければならない。本稿が、後藤の統合主義が日本主義思想の表れであり、戦前の日本主義と同根である可能性が高いことを示唆したことの意義は大きい。

「大日本主義」は一般的に、日本の対外膨張のためには戦争のリスクも辞さない思想と考えられているが、後藤は戦争のリスクを回避しようとするところに特徴があり、一般的な「大日本主義」

の定義に、必ずしも合致しない。後藤の「大日本主義」は「新帝国主義」とも言い換えられるように、従来の帝国主義の問題点を解消し、利益共同体の実現を通して、「民族的世界主義」・「日本の世界」を目指す考え方である。本稿は、ポール・ラインシュの『帝国主義論』に示されている、利益を共有する帝国主義の新潮流と相通じるものが後藤の思想のなかにあることを指摘した。また、後藤の「新帝国主義」の背景には第1次世界大戦後の弱小民族の民族意識の高まりがあり、「民族」・「民族主義」とどう対峙するかが課題となっていた。「新帝国主義」には、その課題に対する後藤の解決案という側面がある。本稿が、後藤の「新帝国主義」が小日本主義と類似性を有し、北一輝の「帝国的人道主義」や外務省革新派の日本主義（「協力主義」とも）といった大乘主義的な對外膨張の主張と類似性を有することを指摘したことは、それらが第1次世界大戦後の帝国主義や日本の外交上の諸条件という同じ土壌から生まれたものであることを示唆するもので、今後の後藤新平研究や帝国主義研究の指針となりうると思う。

本稿のもう一つの意義は、社会政策構想について、従来指摘されてきたドイツの社会政策との関係に加えて、日本の国家社会主義や日本主義との関係、イギリスの防貧制度との関係を指摘し、對外膨張政策に関しても、ドイツ的民族主義および西洋における新しい社会原理に関する議論が参照されていたことを指摘したことである。

ただ、「大日本主義」や帝国主義に関する研究全体について検討が十分なされていないのは、本稿の課題として指摘された。しかし、この課題は、さらなる研究の発展のために提示されたものであって、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。

以上の審査の結果、本審査委員会では、全員一致して、申請者・張易臻氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。